

精選 折口信夫

Ⅲ

短歌史論・迢空短歌編

折口信夫

岡野弘彦 編

慶應義塾大学出版会

精選

折口信夫

Ⅲ

短歌史論・逍空短歌編

目次

凡例

短歌本質成立の時代 万葉集以後の歌風の見わたし

5

女房文学から隠者文学へ 後期王朝文学史

49

歌の円寂する時

101

新古今前後（抄）

123

評価の反省

181

*

『世々の歌びと』追ひ書きにかへて 明治の新派和歌

199

女流の歌を閉塞したもの

*

遼空短歌編

226

師の家の歌の明け暮れ

岡野弘彦

288

解題

長谷川政春

295

218

迢空短歌編

『海やまのあひだ』抄

大正十三年

島山

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

谷々に、家居ちりほひ ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは

山岸に、昼を 地虫の鳴き満ちて、このしづけさに 身はつかれたり

山の際の空ひた曇る さびしさよ。四方の木むらは 音たえにけり

わがあとに 歩みゆるべずつぎ来る子にも言へば、恥ぢてこたへず

いきどほる心すべなし。手にすゑて、蟹のはさみを もぎはなちたり

沢の道に、こゝだ逃げ散る蟹のむれ 踏みつぶしつゝ、心むなしもよ

ゆくりなく訪ひしわれゆゑ、山の家の雛の親鳥は、くびられにけむ

鶏の子の ひろき屋庭に出でゐるが、夕焼どきを過ぎて さびしも

蟹の村

あわびとる蟹あまのをとこの赤きへこ 目にしむ色か。浪がくれつゝ

行きずりの旅と、われ思ふ。蟹あまびとの素肌のほひ まさびしくあり

気多川

きはまりて ものさびしき時すぎて、麦うらしひとつ 鳴き出でにけり

ふるき人 みなから我をそむきけむ 身のさびしさよ。むぎうらし鳴く

麦うらしは、早蟬。鳴いて、麦にみを入れる、
と言ふ考へからの名。



山中なかに今日なはあひたる 唯ひとりの をみな やつれて居たりけるかも

気多川のさやけき見れば、をち方のかじかの声は しづけかりけり

夜

啼き倦みて 声やめぬらし。鴉の止へる木は、おぼろになれり

山の霧いや明りつゝ 鴉の 唯ひと声は、大きかりけり

山中は 月のおも昏くなりけり。四方のいきもの 絶えにけらしも

大正十二年

木地屋の家

鳥の声 遥かなるかも。山腹の午後の日ざしは、旅を倦ましむ

沢なかの^{きぢや}木地屋の家^{きぢや}にゆくわれの　ひそけき歩みは　誰知らめやも

山々をわたりて、人は老いにけり。山のさびしさを　われに聞かせつ

沢蟹をもてあそぶ子に、銭くれて、赤きたなそこを　我は見にけり

戻るとき、よびとめて手にくれたのは、木ぼ^{つこ}であつた。木
地屋でなくてはつくりさうもない、如何にもてづ^なな、親しみ
のある、童子^{こども}といふ名のふさはしい人形である。

木ぼつこの目鼻を見れば、けうとさよ。すべなき時に、わが笑ひたり

山道に　しばくたゝずむ。目にとめて見らく　さびしき木ぼつこの顔



山峡^{かひ}の^{たぎ}激ちの波のほの明り　われを呼ぶ人の声を聞けり

供養塔

数多い馬塚の中に、ま新しい馬頭観音の石塔婆の立つてゐるのは、あはれである。又殆、峠毎に、旅死じいの墓がある。中には、業病の姿を家から隠して、死ぬるまでの旅に出た人のなどもある。

人も 馬も 道ゆきつかれ死にゝけり。旅寝かさなるほどの かそけさ

道に死ぬる馬は、仏となりにけり。行きとゞまらむ旅ならなくに

邑山むらの松の木こむらに、日はあたり ひそけきかもよ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて をはりけむ。命のきはに、言ふこともなく

ゆきつきて 道にたふるゝ生き物のかそけき墓は、草つゝみたり

大正十一年

遠州奥領家

山ぐちの桜昏れつゝ、ほの白き道の空には、鳴く鳥も棲ひず

燈ひともさぬ村を行きたり。山かげの道のあかりは、月あるらしも

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだり来る心はなごめり

山なかに、悸こりつゝ、はかなさよ。遂つげむ世知らず ひとりをもれば

山深く われは来にけり。山深き木々のとよみは、音やみにけり

雪のうへ

雨のうちに、雪ふりにけり。雪のうへに 杳あをつくる我は ひとりを

遂げがたき心なりけり。ありさりて、空しとぞ思ふ。雪のうは解け

大正十年

をとめの島——琉球——

洋なかの島に越え来て ひそかなり。この島人は、知らずやあらむ

地べたから十歩二十歩、深いのになると、四五十歩もおりねば
ならぬ水汲み場さへ、稀ではない。降り井・穴井など、方言で
は言ふ。

をとめ居て、ことばあらず声すなり。穴井の底の くらき水影

処女のかぐろき髪を あはれと思ふ。穴井の底ゆ、水汲みのぼる

人の住むところは見えず。荒浜に向きてすわれり。刳り舟二つ

糸満の家むらに來れば、人はなし。家五つありて、山羊一つなけり

糸満。糸満人を、方言風の言ひ方で、かう言ふ。糸満の町から、一軒二軒五六軒、出れふに來る。寂しい磯はた・島かげなどに小屋がけして、時を定めて、來ては歸る。一年中の大方は、そこで暮してゐる。

夜

下伊那の奥、矢矧川の峽野に、海と言ふ在所がある。家三軒、皆、県道に向いて居る。中に、一人の翁がある。何時頃からか狂ひ出して、夜でも昼でも、河原に出てゐる。色々の形の石を拾うて來ては、此小名の兩境に並べて置く。其一つひとつに、知つた限りの聖衆の姿を、観じて居るのだと聞いた。どれを何仏・何大土と思ひ弁つことの出来るのは、其翁ばかりである。

ながき夜の ねむりの後も、なほ夜なる 月おし照れり。河原菅原

川原の檣あかしの隈せまの繁しみくくに、夜よごゑの鳥は、い寝あぐむらし

をちかたに、水霧みなぎりひ照る湍せのあかり 龍女りゆうにょのかげ 群れつゝをどる

光る湍の 其処そこにつどはず三世みやよの仏ほとけ まじらひがたき、現身うつそみ。われは

ひたぶるに月夜つきよおし照る河原かも。立たすは 薬師やくし。坐まるは 釈迦しやくか文尼もんに

うづ波なみのもなか 穿うけたり。見るくくに 青蓮華しやうれんぐゑのはな 咲き出づらし

水底みなそこに、うつそみの面おもてわ 沈透しんづき見ゆ。来む世も、我の 寂しくあらむ

合歡ねむの葉はの深ふかきねむりは見えねども、うつそみ愛をしき その香たち来も

倭をぐな 以後

家常茶飯

誰びとか 民を救はむ。 目をとぢて 謀叛人なき世を 思ふなり

老い

幾百の咳病しはふきやみの中に見る 老いさらぼへる 古き恋人

遊び

知識びと若きをつどへ とくよ出よ嬢かみよ出よ と言ふ遊びをするなり

石の上にて

何ごともなかりしごとく 朝さめて渡瓶の水を くつがへしたり

沓下ゆ出でたる指を 生き物の如く見て居り。悲しむにあらず

冬至の頃

すぎこしのいはひのときに 焼きし餅。頒ちかやらむ。冬のけものに

耶蘇たんにやうゑ誕生会の宵に こぞり来る魔ものの声。少くも猫はわが腓こぶら吸ふ

基督の 真はだかにして血の肌はだへ 見つゝわらへり。雪の中より

われひとり出でゝ歩けど、年たけて 生肌いきはだ光る おどろきもなし

沖繩を憶ふ

なげきすることを忘れし わたつみの島の翁は、さびしかるべし

大海原年あけ来たる青波に 向きて思へば 時移りゆく

醜

数人の飽きあきしつゝ 去りし後、暗きべんちに 我は倚り行く

若き明治

かたくなに 森鷗外を蔑^さみしつゝありしあひだに、おとろへにけり

埃風

夏ごろも 黒く長々著装ひて、しづけきをみな 行きとほりけり

かそかなる幻―昼をすぎにけり。髪にふれつゝ 低きもの音

青草の生ひひろごれる 林間を思ひ来て、ひとり脚をくみたり

山深く ねむり覚め来る夜の背肉そじく―。冷えてそゝれる 巖いわの立ち膚

曇る日の 空際そらぎはゆ降る物音や―。木の葉に似つゝ しかもかそけき

まさをなる林の中は 海の如。さまよふ蝶は せむすべもなし

降りしむる 大き 木の股。近々と 親鳥一つ巢たに亘たてり。見ゆ

夜の空の目馴れし闇も、ほのかなる光りを持ちて 我をあらしめ

嬢をとめ子ばか瑩

すぎこしのいはひの夜更け、ひしぐと畳たたみに踏みぬ。母ははの蹠くろひし

々

をとめありき。野毛の山に家ありて、山を家として、日々出で

遊びき。血を吐きて臥し、つひに父母のふる国に還ることなかりき。稀々は、外人墓地の片隅に、其石ぶみを見ることありき。いしぶみは、いと小くてありき。さて後、天火人火頻りに臻りし横浜の丘に、亡ぶることなく、をとめの墓は残りき

たゞ暫し まどろみ覚むるかそけさは、若きその日の悲しみの如

青芝に 白き躑躅の散りまじり 時過ぎしかな。こゝに思へば

山ぎはの外人墓地は、青空に茜匂へり。のぼり来ぬれば

くれなるの 野植しどみの花のこぼれしを 人に語らば、かなしみなむか

我つひに遂げざりしかな。青空は、夕かげ深き 大海の色

赤々と はためき光る大き旗―。山下町やましたちやうの空は 昏るれど

壁のうへ